山口大学教育学部研究論叢　第69巻　91頁～97頁　2020年1月

小学校生活科における整理収納教育の授業実践とその効果
－通常授業での住教育促進に向けた実践研究－

西尾幸一郎・中島　菜美*・志賀　直美**・重枝　孝明**

Practice and the Effects on Education of Cleaning up in Elementary School Living Environment Studies: A Practical Study for Promoting Housing Education in Regular Classes

NISHIO Koichiro, NAKASHIMA Nami*, SHIGA Naomi**, SHIGEEDA Takaaki**

（Received September 27, 2019）

1．はじめに

（1）学校教育における住教育を取り巻く社会的背景

家庭科住領域では、災害や家庭内事故に対する「安全」や「環境配慮の住まい・住み方」、「バリアフリー・ユニバーサルデザイン」、「住まいの維持管理」など、住生活に関わる今日的、社会的な課題や日常生活に役立つ学習内容が多く含まれており、児童生徒の学習関心も高い[1)]。一方で、学校教育における住教育は質・量ともに不十分であることが多くの研究者から指摘されてきた。家庭科教員の多くは住領域に対して苦手意識を強く持っており、十分に授業をできていないのが現状である[2)]。また、1998年の学習指導要領改訂で家庭科の授業時間が大幅に削減され、特に住領域に充てられる時間数は衣食領域と比べて顕著に少なくなっている[3)]。

その背景には、大学での住居の授業が少ないために教員自身の住領域に対する認識や知識が低いことや、衣・食領域と比べて学習経験が不足していること、授業の方法（体験・実習のさせ方）がわからないこと、授業準備のための時間がないことなどがあげられる[4) 5)]。

このような状況を改善するために、住居学担当教員を中心に住教育教材の開発が意欲的に進められており、1/10組立模型を活用した領域横断型の建築講座[6)]や、ドクターユニバーサルデザイン授業[7)]をはじめとして良質な教材が少しずつ蓄積されている。しかしながら、開発された教材の多くは、各教科等の目標や内容と十分に合致していないこともあり、それらの成果が教育現場全体に広がっているとは言い難い。

（2）他教科との連携を図ることの利点。現行の教育制度でできることから

平成29年３月公示の小学校家庭科学習指導要領[8)]において、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことなどカリキュラム・マネジメントの視点が重要視されている。教科連携では、学会等での発表数がここ数年で飛躍的に増加しており、家庭科と英語[9)]、生活科[10)]、図工[11)]等との連携で多くの成果が残されている。ただし、その大部分は衣食領域との連携であり、住領域と他教科との連携はほとんどみられない。この背景には、特に中学校、高等学校では教科担任制をとっているため、他の教科の学習目標や内容を把握するのが困難であることなどが指摘されている[12)]。

以上のような視点をふまえて、筆者らによる一連の研究[13)]では、実務家教員らと共同で、教科連携を前提とした住教育教材を開発し、生活科・保健体育・社会科などの他教科に配分された時間の中で活用することで、相互の学習を深化させつつ、住教育に関わるトータルの学習時間を十分に確保することを目的としている。本稿では、小学校生活科において整理収納の授業を実践とその教育的効果について報告する。

＊長崎県佐世保市立花高小学校　＊＊山口大学教育学部附属山口小学校

２．研究概要

２－１．小学校における整理収納教育の現状と課題

小学校教育において整理収納教育は、生活科（１学年）や家庭科住領域（５，６学年）、特別活動（教室の整理収納や掃除など）等の中で積極的に取り組まれてきた。しかし、学校で学んだ知識や技術が、家庭生活の中で十分に生かされておらず、保護者から見て、「散らかったままでも気にしない」という児童が約４割もおり、家庭で自主的に片付けをする児童は１割にも満たないのが現状である[14]。

このような問題の背景には、小学校での学習過程の在り方が少なからず影響を及ぼしていると考えられる。つまり、１学年の生活科の学習内容は道徳的な側面が強く、整理収納の適切な方法や知識が教えられておらず、また、「部屋が片付いている＝快適である」というような価値観のすり込みも行われていないこと。そして、適切な方法や知識を身に付けず、内発的に動機づけられないままに、特別活動の中で整理収納等を実践することを強いられている。そして、５年生の家庭科においてようやく方法を学習するが、この頃の発達段階では、すでに快・不快などの感性や「整理収納や片付けは面倒なもの」という価値観などがすでに形成されていることから、整理収納等について内発的に動機づけることは困難であると考える。

以上のような視点をふまえた上で、本授業実践では、１学年という比較的に早期の段階で整理収納教育を実施し、適切な方法や知識の身に付けるとともに、遊びを通して学習することで整理収納に関する内発的な動機づけを育てることを目的としている。

２－２．授業実践の内容

（１）対象および時期

山口県Ｙ小学校第１年生の児童35名を対象として2018年12月に行った。表１の第１～３時、５，６時は第３著者が担当し、第４時（本時）は第２著者が担当した。なお、本時は、整理収納教育に関する保護者の意識・態度を高めることや、保護者の立場からも本授業の教育的効果を評価してもらうことを意図して、授業参観日（参加者29名）に行った。

（２）単元について

分析対象とする生活科の単元は「じぶんでできるよ」（全６時間計画）である。本単元の学習目標は「家庭生活について、調べたり、尋ねたりすることを通して、自分の家庭生活をふり返り、家庭生活を支えている家族のことや、家族のよさ、自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たそうとする」ことである。本時は全６時間計画の第４時に設定した。小学校生活科学習指導要領[15]「サ　基本的な生活習慣や技能」の内容であり、「整理についての基本的な知識及び技能を身に付け、身の回りのものを整理することの楽しさを感じさせる」ことをねらいとしている。

単元の指導計画は表１の通りである。第１～３時で家庭生活の調査を通じて、家族や自分の役割についてふり返りをさせる。そして、第４時（本時）で自分の役割（整理収納）を実践するための方法を身に付けさせた上で、家庭での実践（第５，６時）に引き続くものとした。

（３）第４時（本時）の授業展開

表２に示した指導計画に沿って授業を展開した。その概要は以下①～⑤に示す通りである。

①めあての提示

まず、お片付けができずに部屋が散らかっている兄妹（７才、５才）のために「お片付けをしやすくする方法を考える」という学習活動を行うことを伝えた。

②探しものゲーム

２人１組に分かれて、兄妹のおもちゃ箱（様々なもののイラストが描かれた32ピースのおかたづけキッズパズ

表１　生活科「じぶんでできるよ」（全６時間計画）

時	主な学習内容・活動
1	自分がしてもらって嬉しいこと，自分のために家族がしてくれたことについて話し合う
2	家族がしてくれていることを調査するために、調べ方やレポートの書き方について学習する
3	調べてきたことをクラスメイトと共有し，家族がしてくれていることを内容ごとに分類する
4（本時）	知育玩具（おかたづけキッズパズル）を使って，整理収納の基本的な知識や技能を身に付ける
5	自分が家族のためにできることを５日分計画する ※各家庭で実践、レポートを作成する
6	実践を通して気づいたことや感想を伝え合う

表２　本時（第４時）の指導展開

	主な学習内容・活動
導入	①めあての提示：部屋が散らかっている兄妹のためにお片付けをしやすくする方法を考えるよう
／展開	②探しものゲーム：２人１組に分かれて、兄妹のおもちゃ箱（32ピースのおかたづけキッズパズルが乱雑に入った箱）の中から、指定されたものを探し出す ③おもちゃと学校で使うものをわける：隣の児童と相談しながら、32ピースのものを種類ごとに、「遊びの時に使うもの」と「勉強の時に使うもの」の２つに分類する【グルーピング】 ④おもちゃ箱によく使うものを入れる：「遊びの時に使うもの」に分類されたパズルの中から、隣の児童と相談しながら８ピースを選択し、それらをおもちゃ箱に収納する【適正量の管理】
／終末	⑤発表・振り返り：兄妹がお片付けをしやすくするにはどうすればいいかを発表する。

ル（図１）が乱雑に入った箱）の中から、指定されたものを探し出すというゲームを行った。この活動を通して、ものが適切に整理されていなければ、特定のものを探すことが難しく、見つけるまでに時間がかかることを体験させた。

③おもちゃと学校で使うものをわける

全てのピースをおもちゃ箱から出して、机の上で並べさせた。そして、隣の児童と相談しながら、32ピースのものを種類ごとに、「遊びの時に使うもの」と「勉強の時に使うもの」の２つに分類させた（グルーピング）。

④おもちゃ箱によく使うものを入れる

「おもちゃ箱には８個しか入りません、兄妹２人ともが納得できるようなものを８個選びましょう」と指示した。上記③で「遊びの時に使うもの」に分類されたパズルの中から、隣の児童と相談しながら８ピースを選択し、おもちゃ箱に収納させた（図２）。これらの活動を通して、整理の中でも特に重要な要不要の判断や、適正量管理の原則について学習させることを意図している。

⑤発表・ふり返り

最後に、これまでの学習活動をふまえて、兄妹がお片付けをしやすくするにはどうすればいいかを、隣の児童と話合わせ、その結果を発表させた。

２－３．有効性の検証

（１）評価方法

授業実践による教育的効果を検討するために、授業実施の２週間前と授業終了２週間後に後述のアンケート調査を実施した。対象は児童とその保護者であり、調査票の配布と回収は学級担任が行った。有効回収数は、授業前が児童34部、保護者33部、授業後は児童30部、保護者29部であった。

①保護者に対するアンケート

授業前のアンケートでは、家の中で児童が片付けられずに困っている場所やものについて複数選択肢で質問した（図３，４）。また、児童の片付けについて困っていることの具体的に内容について自由記述で回答を求めた。授業の前後のアンケートでは、保護者から見た児童のお片付けに対する意識や態度（４項目，図５）、家庭での整理収納教育の状況（５項目，図６）に関する質問項目について、「あてはまる」～「あてはまらない」までの４段階のリッカート尺度にて回答を求めた。また、授業後のアンケートでは、本授業の内容や学校での整理収納教育に対する感想・要望について自由記述で回答を求めた。

事前事後の比較には、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」と「あてはまらない」の２グループに分けて、McNemar検定をおこなった。有意水準は５％とした。また、自由記述式の設問は意味内容の類似性を検討し、その類似性からカテゴリーを生成した。なお、検討においては研究者間で繰り返し検討を行い、結果の信頼性・妥当性を確保できるように配慮した。

②児童に対する質問紙の内容

授業の前後のアンケートでは、児童の片付けに対する意識や行動に関する質問項目（４項目，図７）について、「はい」と「いいえ」の２択で回答を求めた。また、「授業後のアンケートではお片付け博士（授業者）に言われたことを守っていますか」という質問項目について、「はい」と「いいえ」の２択で回答を求めた。事前事後の比較には、「はい」と「いいえ」の２グループに分けて、McNemar検定をおこなった。有意水準は５％とした。

なお、本研究におけるデータの集計及び解析には、統計解析ソフトSPSS Statistics Version21 for Windowsを使用した。

（２）倫理的配慮

本研究は、国立大学法人山口大学人を対象とする一般的な研究に対する審査委員会より承認（管理番号2018-005-01）を得て実施した。対象者には、質問紙と共に依頼文書を配布し、研究目的及び使途、匿名性の保障、調査への参加は自由意志であり、質問紙への返信をもって同意とすること、データは研究目的以外での使用をしないことを明記した。

図１　おかたづけキッズパズル（㈱整理収納教育士）

図２　授業の様子

３．結果と考察

３－１．保護者アンケートの結果

（１）児童のお片付けについて困っていること

授業前のアンケートにおいて、各家庭において児童が片付けられないことで困っている場所やものについて質問した。その結果は図３、４に示す通りである。

場所別では、おもちゃ収納（60.0％）が最も多くなり、以下、遊びスペース（54.3％）、リビング周辺（34.3％）、本棚（28.6％）、学習机（28.6％）、ダイニングテーブル周辺（8.6％）、就寝スペース（5.7％）、その他（5.7％）と続いている。物別では、おもちゃ・遊び道具（71.4％）とする回答が多くなり、以下、文房具（34.3％）、プリント（34.3％）、衣服・制服（28.6％）、本・絵本（25.7％）、鞄・ランドセル（14.3％）、教科書・ノート（8.6％）、その他（5.7％）と続いている。

表３は、保護者が児童の片付けに関して困っていることの具体的な内容を自由回答欄に記述してもらった結果をまとめたものである。記述の内容を整理すると大きく４つのカテゴリーに分類できる。

カテゴリー別にみると、本やおもちゃを片付ける前に次の遊びに移行する、保護者からの声掛けが必要であるなどの「片付けの習慣化」に関することや、所持品の要・不要の判断ができない（不要なものを捨てられない）、整頓がうまくできないなどの「整理収納のスキル」に関する記述が多かった。また、保護者自身も整理収納に関する技術や知識が不足しており、児童への「整理収納の教え方」がわからないこと、児童が片付けをしやすいように「自宅の収納環境」が整っていないことに関する記述が多かった。

以上の結果より、既存研究[16]と同様に、特に児童のおもちゃや遊び道具の片付けで困っている保護者が多いことがわかった。また、子どもへの適切な教育方法がわからずに困っている保護者も多いことから、小学校における整理収納教育では、児童の整理収納に関する姿勢や態度を育むだけでなく、保護者に対して家庭での児童への接し方や教育方法を伝えることも重要であることがわかった。

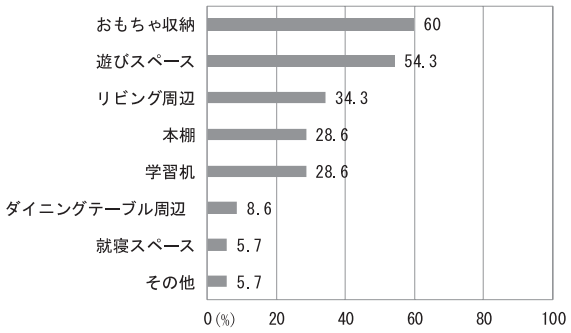

図３　児童が片付けられず困っている「場所」

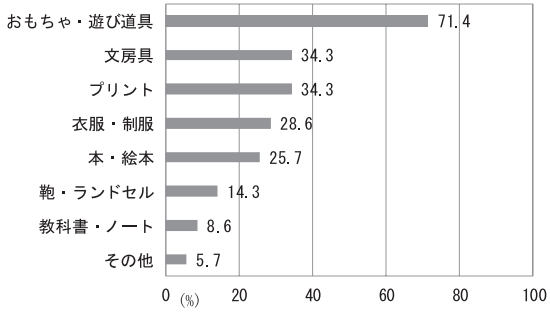

図４　児童が片付けられず困っている「もの」

表３　児童の片付けについて困っていること（自由記述より一部抜粋）

カテゴリー	記述内容
片付けの習慣化	▶ 片づけ方やお手伝いの方法など言われると出来るのに、遊んでいる最中は次から次へと出して部屋が大変なことになる。 ▶ 使ったものは元の位置に戻す、出したら片付ける、といったことが全くできていません。ゴミもその場へ置いたまま。 ▶ 声かけしないと片づけない。
整理収納のスキル	▶ 物をためる癖がついている。ため込まないよう教えても、時間が経つまでしばらくそのままにしている。 ▶ おもちゃ類が増える一方で、収納できず、片付かない。 ▶ 片づけはしているが、整理整頓せずに押し込んでいる。
整理収納の教え方	▶ 普通に言ってもすぐに動かないので大声を出すか、自分で片付けてしまいます。親も堪え性がないので、何でもやってあげていることがいけないのだとは思っているのですが... ▶ 子供に意識付けをさせるにはどうしたらよいか困っています。 ▶ 処分のタイミングが難しい。大人にとってガラクタでも子供にとっては大切な物だったりする。そういった物がたくさんありすぎて困ります。 ▶ 親である私自身も片づけが苦手であるため、うまく片づけを教えることができないという悩みがあります。
自宅の収納環境	▶ 学校机を持っていないので、文具や学校用具の収納が少なく、雑然としがちです。もう少しわかりやすくしてあげたいと思いつつ、できていないのが現状です。 ▶ 子どもが片付けやすい、収納方法や工夫が難しい。 ▶ 収納場所が足りない。物が多すぎる。

（２）児童のお片付けの様子と整理収納教育の状況

図５は、保護者から見た児童の片付けに対する意識や態度（４項目）について授業前後の変化を示したものである。McNemar検定にて授業前後で比較した結果、児童の片付けに対する意識や態度として有意差が見られたものは、「お片づけをすることを楽しんでいる」の１項目で５％水準の有意差が認められ、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」を合わせると授業前の18.2％から授業後は31.0％に増加した。

また、授業後のアンケートにおいて「お子さんの“お片付け”に関する意識や行動に変化はありましたか」という質問に対しては、はい17.9％、いいえ50.0％、わからない32.1％となった。「はい」と回答した保護者の割合は全体の２割弱にすぎず、多くの場合で意識や行動変容には至っていないことが確認された。意識や行動がどのように変化したか自由記述で回答を求めたところ、「寝る前に出したものは片付けしていた」、「自分から“かたづけを”という言葉を発するようになり、かたづけをするという意識が持てるようになりましたが、行動が伴うにはもう少し時間がかかりそうです」などの回答がみられた。

図６は、家庭での整理収納教育の状況（６項目）における授業前後の変化を示したものである。McNemar検定にて授業の前後で比較した結果、「子どもが楽しみながら片付けができるように収納方法や接し方などで工夫をしている」の１項目で５％水準の有意差が認められ、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」を合わせると授業前の30.3％から授業後は41.4％に増加した。このことは、整理収納教育に関する保護者の意識や行動が変化したこと、各家庭において児童の内発的動機づけを育成し、整理収納に関して適切な知識や方法を伝えるという教育的機能が少なからず強化されたことを示していると考える。

また、授業後のアンケートにおいて、学校での整理収納教育に対する意見や要望について自由記述で回答を求めたところ、本時に関する意見としては（表４）、「カードを使った授業でしたのでわかりやすかった」、「授業でお片付けの内容があると面白い」、「家族の一員として役に立とうという自覚が芽生えて嬉しく思う」などのように好意的な回答が多かった。また、今後の要望としては、「低学年だけではなく、全ての学年に対して学年に応じた片付けの授業があっても良いのではないでしょうか」、「なかなか身につかないので、また片付け教室をやってほしい」などのように生活科の授業のみならず、特別活動等でも継続して整理収納教育を実施することを期待する回答が多くみられた。

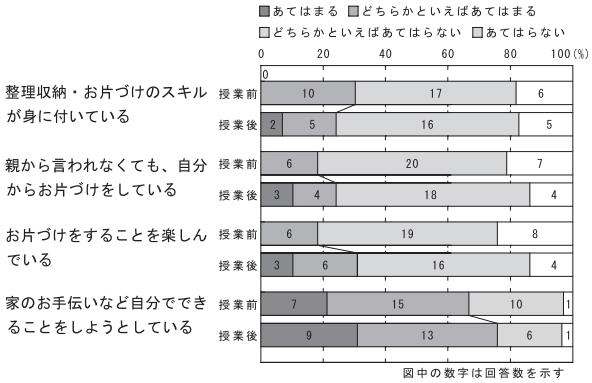

図５　児童の片付けに対する意識や態度（前後比較）

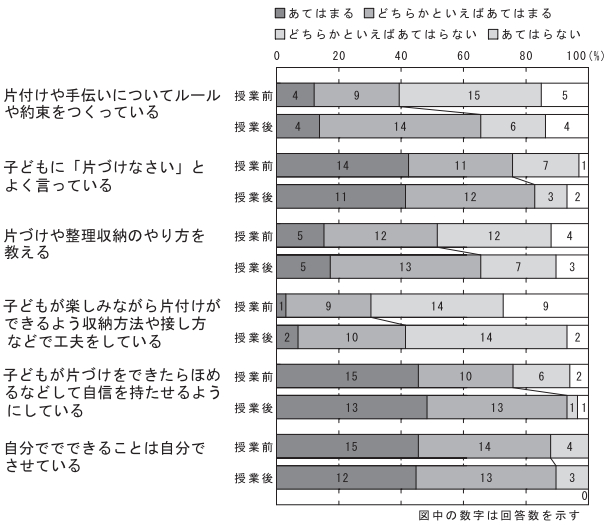

図６　家庭での整理収納教育の状況（前後比較）

表４　学校での整理収納教育に関する意見や要望（自由記述より一部抜粋）

■本時に対する意見

- にこにこ家族の取り組みの中に手伝いや掃除を自ら取り入れた。家族の一員として役に立とうという自覚が芽生えて嬉しく思う。
- 授業でお片付けの内容があると面白いと思いました。
- カードを使った授業でしたのでわかりやすかったと思います。
- 身近なところから話してくださったので、とても良かったです。ありがとうございました。

■今後の要望

- 低学年だけではなく、全ての学年に対して学年に応じた片付けの授業があっても良いのではないでしょうか。
- 今後も続けていただきたいです。
- なかなか身につかないので、また片付け教室をやってほしい。親も物の位置を子どもと相談して同じところに戻すことをしていこうと思っています。
- 机の中、ロッカーの中が常に汚いのがずっと気になっています。定期的に、机の中を整頓する時間を作っていただけたら大変助かります。習慣になると自分で進んでできるようになるのかなと感じています。

３－２．児童アンケートの結果

図７は、児童のお片付けに対する意識や行動（４項目）における授業前後の変化を示したものである。McNemar検定にて授業前後で比較した結果、いずれの項目についても統計的に有意な差はみられなかった。ただし、授業後のアンケートにおいて「おかたづけはかせに いわれたことをまもっていますか？」という質問に対しては、65.7％の児童が「はい」と回答しており、授業で学んだことを多少なりとも意識しながら生活している様子が読み取れた（図８）。

また、５、６時間目（表１）の児童による家庭での実践報告において、学習机や本棚、靴箱の整とんを行い、楽しかったので今後も続けたいという前向きな発表がいくつかみられた。

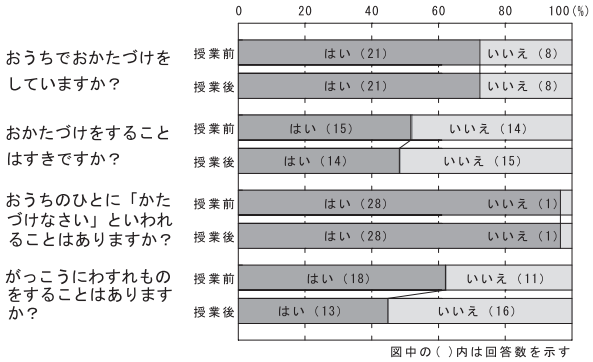

図７　児童のお片付けへの意識や行動（前後比較）

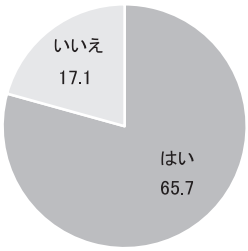

図８　おかたづけはかせに
いわれたことをまもっていますか？

４．まとめ

本研究では、小学校１学年の生活科の中で、家庭科住領域における学習内容の一部を取り入れた整理収納教育を行い、その有効性について検証した。その結果、家庭において児童がお片付けを楽しんで行うようになったことが保護者から確認されており、整理収納に関する児童の内発的動機づけが活性化されたことが明らかになった。また、本時を授業参観日に実施したことや、宿題として家庭での実践を課したことなどにより、保護者の意識や行動に変化が見られ、子どもが楽しみながら片付けができるように収納方法や接し方で工夫することにもつながっていることがわかった。一方で、片付けに関する適切な知識や方法が十分に身に付いているとは言い難く、片付けの習慣化にまでは至っていないことも確認された。

今後は、家庭でのお片づけの習慣化の実現に向けて、家庭科や特別活動等での学習指導内容の改善や教材開発、英語科での整理収納教育の実践などにも取り組んでいく予定である。

謝辞

本研究は2018～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（課題番号：18K02223、研究代表者：西尾幸一郎）によるものである。また、本研究で調査に協力してくださった児童・保護者の方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

１）小川裕子・中島喜代子・石井仁・田中勝・杉浦淳吉・小川正光：中学生の学習要求からみた家庭科住居領域授業実践に関する考察、教科開発学論集、２、107-115、2014
２）速水多佳子・関川千尋：学校教育における住居領域の教育システムの有効性について、日本家政学会誌、51（４）、317-330、2000
３）小川裕子・中島喜代子・石井仁・田中勝・杉浦淳吉・小川正光：中学校，高等学校家庭科における住居領域授業実践の実態からみた課題と提言、日本家庭科教育学会誌、57（１）、3-13、2014
４）正岡さち・小谷知恵・亀崎美苗・田中宏子：島根県の小学校家庭科における住教育の実態と課題、島根大学教育学部紀要（教育科学）、46、53-60、2012
５）妹尾理子・大矢英世・金子京子・冨田道子・野口裕子：住教育のカリキュラム開発に関する実証的研究、住宅総合研究財団研究論文集、36、411-422、2010
６）後藤哲男・広川智子・飯野由香利：中高生を対象とした1/10組立模型を活用した体験的な領域横断型建築講座、建築雑誌、1701、p.71、2017
７）KIDS DESIGN AWSARD（最終閲覧日：2019-8-8）https：//kidsdesignaward.jp/
８）文部科学省：小学校学習指導要領解説 家庭編、東洋館出版社、2018
９）荒井きよみ：教科連携による「家庭基礎」調理実習における「深い学び」の効果、日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集、60、p.29、2017
10）土岐圭佑・岡田みゆき：豆類を教材とした食教育プログラム：－小学校低学年における生活科授業の提案－、日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研

究発表要旨集、59、p.54、2016
11）高橋智子・村上陽子：学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み（no.6）―図画工作科・家庭科における連携授業の実践と評価：授業づくりについて―、教科開発学論集、4、123-133、2016
12）黒光貴峰・徳重礼美：家庭科と他教科の関連性に関する研究、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、21、35-50、2011
13）田本正一：小学校社会科まちづくり学習における政治的活動の場としての公的領域の設計 －通常授業での住教育促進に向けた実践研究（その２）－、日本建築学会大会学術講演梗概集、7-8、2019
14）株式会社フェリシモ「【アンケート結果】放っておいてもお片づけできる子は……？」モノコトづくりラボ、2018（最終閲覧日：2019-9-13）
https：//info.felissimo.co.jp/monokotolabo/enq/ikuji/037010.php?xid=p_nr_ot_18031202_RELEASE
15）文部科学省：小学校学習指導要領解説 生活編、東洋館出版社、2018
16）野村不動産アーバンネット「子どものお片づけに関するアンケート結果発表」ノムコム with Kids、2015（最終閲覧日：2019-8-8）
https：//www.nomu.com/withkids/enquete/vol03.html